

私の「おくりびと」

——父を葬る

裴

崢

日本映画「おくりびと」が、2008年アカデミー賞外国語映画賞に輝いた。さっそく観てきた。元オーケストラチェロ奏者の主人公が、紆余曲折の末、「旅のお手伝い」に間に合わせ程度の参加という取り掛かりから、やがて全身全霊で納棺に打ち込む本物の「おくりびと」へと変貌してゆく。

遺体を丁寧に清め、顔に化粧を施し、生前愛用の服を着せ、蘇ったかのような生氣のある姿に返して納棺する。型に嵌まったぎこちない動きから、死者への尊敬と思いやりに溢れた表情としぐさに変わり、その一挙手一投足が銀幕から舞い上がってくる。死のお別れとはこんなに美しく、そして悲しいまでも、温かく、神々しいものなのか。

失った大切な人を送る。故人へ敬意を払い、冥福を祈り、その人の旅立ちを全うする。儀式が、普段身近ではない、しかし誰も避けられないテーマ「死」を考えるきっかけとなる。孔子の言う如く、「生、事之以礼；死、葬之以礼、祭之以礼(生けるときはこれに事うるに礼を以ってし、死せるときはこれを葬るに礼を以ってし、これを祭るに礼を以ってすべし)。」生と死に向き合う葬儀の礼式を通して、人々は死者を偲ぶ気持ちを強く抱き、それぞれの生き方やその家族、友人、社会などとの関わり方を問い質す機会を得ることともなろう。私には、映画が父のことと重なって見えてきた。

父の頼み

2008年秋に父を亡くした。兄から危篤の知らせを受けて北京の病院に駆けつけ、兄弟と交代で日夜の看病をした。授業再開のため日本に戻った翌日、父は他界した。父の最期を看取る事は出来なかった。日本へ留学し、就職も長くなり、父とは帰省の時にしか会えなかったせいか、私の中では、父は未だに実家か病院にいて私を待っているのだ、と覚えてならない。

父は貧しい農家に生まれ、16歳で革命に身を投じ、その頃から主に農協(農民協会、日本の農業協同組合のような組織)、農民運動に携わった。新中国誕生後間もなく、中共(中国共産党)中央農村工作部に赴任し、以来、一貫して農業政策畑一筋を歩み続けていた。仕事柄、現場への出張が多く、数ヶ月や半年の留守も珍しくなかった。同じ職場に勤める母も、父ほどではないが、農村や地方によく出かけていたため、私は小学校から寮に入れられ、週末にしか家に帰ることができなかった。

父のことを考えるとき、真っ先に脳裏に浮かんでくる二つの場面がある。

ある午後、私は、校門前に客の面会がある、と突然ルームメートに告げられた。慌てて駆けつてみると、父だった。「帰って」と私はとっさにそんな言葉を発した。出張から北京に帰った父は、私の顔が見たくて、駅から真っ直ぐに学校まで来ていた。しかし、友達に甘えん坊と思われるのではないかと私はひねくれていた。父はそのまま引き帰した。

中学1年の夏休みに、市の行事で夜遅くまで遠い式場に出かけた。最寄のバス停から自宅までは10分ほどの道があるので、折しもその日地方から帰宅したばかりの父が、母の言いつけでバス停まで私を迎えに来た。同級生とバスを降りた私は、暗闇の中でぼつんと立っていた父をみとめたが、声も掛けずに先を越して行った。携帯電話はもろんなかった時代なので、何時に着くかも分からず、父は随分待っていたに違いない。

決して愉快的思い出ではないものの、父のことを思えば、この二つのシーンが先ず瞼の裏に浮かぶ。できることならあの午後、あの夜に戻りたい。父の懷に飛び込み、思い切り父に抱かれたい。そして父と手を繋いで一緒に家路を辿りたい。

日本に来てからは、母ではなく父からたまに手紙を貰った。長い手紙である。内容は、社会主義や資本主義に関する理解や、鄧小平の談話や共産党代表大会の文献などをちゃんと読みなさい、というような堅苦しいことばかり綴られていて、苦笑を誘われた。しかし幾度引越しても、その度に父の手紙を取り出してはまた収めて共に移動した。

65歳、ちょうど国の改革開放政策の最中であつた1985年に父は退職した。引退後も父は相変わらず忙しく、日々6、7種類の新聞を読み漁っては、国内外の情勢に目を配り、一方で『紅樓夢』などの古典を再び引っ張り出して耽読したり、『唐詩宋詞』を暗誦したりと暇がない。老人学校で書道や絵画、詩作も楽しんでた。おかげで家中の壁が父の作品で賑わっていた。ただ、意気軒昂の作者とは裏腹に、お世辞にも褒められる出来栄とはいえない。返って老人学校で毎回席を取ってくれているという女性の存在が母をハラハラさせた。

そんな父が、十数年前胃がんを患った。手術前に、父は遺言を母に預けた。最後のお別れは略式で、告別式も葬式も要らないと書きながら、遺灰は郷里に送ってもらい、自分の母親（私の祖母）の膝元で眠りたいと頼んでいた。これが平素から唯物主義者をもって自任していた筋金入りの共産党員のわが父か、と私は目を疑った。

ここ数年、中国では葬式の多様化が進んでいる。職場による社葬の他に、風俗を重んじて財産を子どもに残すよりも、葬儀に使うことで子孫に福をもたらすことができると考えて葬儀を盛大に執り行う人もいれば、身内や親友だけの簡素な家族葬を選ぶ人もいる。

中国では、狭い都会では通常はお墓を持つことができない。国の公共墓地の共同供養地に、保管期間制限で年代順に骨壺を並べて安置し、墓石の代わりに壁に故人の名前を刻み、遺影を嵌めこむ。お墓参りの時は、それぞれの壁の前に供花を上げ、香紙を焼くことなどで故人を懐かしむ。しかし、昨年¹⁾の清明節には、八宝山人民墓地²⁾の広場に赤い回収箱が置かれていたそう。持参の香紙を回収箱に入れて、5元(=約75円)相当の造花を貰うのだ。従来の慣習のように紙を焼き、香を焚くのは環境に悪く、消防の観点からも危険なので、「文明的」な新しい試みが形となった。

なお、近年インターネットで香を上げてお墓参りに代えるスタイルまで現れ、若者に人気があるという。四川大地震後最初の弔いの季節となった昨年の清明節には、ウェブ上に多くの記念堂が祭られた。亡き親族や友をプライバシーの守られた場所からゆっくりと静かに偲べるだろうが、味気ないと残念がる声もある。

逆に「味気濃厚」な発想も試みられている。墓穴を何と「定情物」として婚約者にプレゼントして結婚の契りを結ぶという発想だ。07年2月14日、南京市郊外の公共墓地である雨花功德園には30代の若い女性が来て、2万元(=約30万円)でボーイフレンドに墓穴を購入した。このような

形で二人の誰よりも美しい愛情を表したかったそうだ。「礼品墓地」——中国にだけありそうな奇想天外の創作だ³⁾。

だが、都会と違って、地方や農村では先祖伝来の墓地があり、現在でも慣習を重視した儀式的な葬式を相互扶助で行う例が少なくない。

父を郷里に送る

年の春先、父が残した遺言に従って、父を生まれ故郷に連れて帰ることになった。

故郷は、山西省にある小さく、未だに裕福ではない村だ。そこに5代続く先祖一族の墓地があり、私の祖父母、また、面識のない長老達が眠っていらっしゃる。世代や直系か親族かによって列が異なり、兄や弟及び彼らの配偶者なども指定席があるらしい。幸か不幸か娘である私のスペースはないのだ。

中国だけではなく、仏教や儒教が混在して信仰される国や地域では、死は終わりではなく、再生という陰陽輪廻と見て、死後の居場所、しいては居心地も重んずる。

物心が付いてから私は祖父母と北京でずっと同居していたが、祖父が亡くなった時、父は出張中だったため、祖父を北京の公共墓地に入れた。「田舎から北京に出る前に、折角立派な棺を作って貰い、預けて来たのに」と、祖母と墓参りに行くと、よく恨み言を聞かされた。随分上質な木材のこしらえだったらしい。その後1966年に文化大革命が始まり、父は早い段階でこの革命による批判の対象となり、とても祖父の遺灰を故郷に送ることができる立場ではなくなった。このため、村の親戚たちが自発的に旅費を工面してわざわざ北京に出向き、祖父を連れて帰った。しかしこの間に、結局私の“二爺”（祖父の弟）が兄の死を悲しむあまりか、病に倒れ、間もなくあの世に追って行ってしまった。その際、二爺のために兄の「立派な棺」が使われた。そのことが祖母には少々悔しかったかもしれない。祖母は息子の身を案じて、父の名誉が回復されるまで北京に留まった。やがて文化大革命が収束した後、祖母は故郷で最期を迎え、自ら注文したお気に入りの棺に安眠した。

この祖父母のエピソードにも見られるように、死後の「住宅」の姿は非常に重要な事柄とされ、死後の居住環境の選択も生存時のそれと同じく風水によって決める慣わしがある。そうして選ばれる場所は山に寄掛かり、水に囲まれ、静かで穏やかなところがよいとされる。歴史上の皇帝陵はどれも風水から厳選された場所であり、風光明媚で視界のよい地となっている。風水の良し悪しによって、生活の繁栄も子孫の幸福も影響されるそうだ。こうした考え方は庶民にも影響を及ぼし、今なお多くの人々に守られている。また、風水は迷信だけで片付けられず、人間と自然との調和を求める、ある種合理的な部分もあるようだ。最近では風水の考え方は生態学や土壌学などとも密接な関係があると指摘されている。

但し、故郷に帰りがたかった父に関していえば、おそらく迷信とも新しい生態学などとも無縁に、ただ長年親孝行できなかった母親の傍にせめてあの世では付き添っていたただけではないか、と推察する。

さて、兄と弟は準備のため、10日ほど先に地元へ向かっていた。私の到着を待たずに兄弟だけで父の思いを果たそうと思案してさえいたらしい。ところが兄の話では村ではそう簡単には事が運ばなかった。葬儀の段取りはすべて、一族総出はむろんのこと、村の遠近親戚一堂、さらには

大小発言力のある人も交えて会議を開くやら、風水師を仰ぐやらで、大騒ぎとなった。

風水師は父の性別、年齢、干支、生死日時などによって、出棺時刻、墓穴の向きなどを決める。奇月に亡くなれば、偶月に埋葬、偶月に死すれば、奇月に埋める。それは「剛月」と「柔月」とも呼ばれ、日時にも奇数偶数などとの言われがある。しかるべき厳密な「分析」の結果、日曜日朝日が昇る前の儀式とすべしと断言された。その日時であれば私は間に合う。まるで父が計算して逝ってしまったように思えた。

日曜日早朝、霊堂から10日前に預けてあった父の骨箱を取り出して、村に向かう。都会なら黒い生地で骨箱を包むが、ここ農村では真っ赤な生地を使う。「紅白喜事」と言われるほど、葬式も結婚と同じくめでたいとする考えのためだ。それなのに、街角で赤い包みを抱えているとタクシーは寄ってくれない。不吉と思うからだ。幸いに、同郷の出稼ぎドライバーに出会った。お陰で、兄弟はここ10日間というものの毎日彼の車を頼りにして諸般の準備に駆け回ることができていたという。

兄の話では、彼のタクシーを運良く拾えた初日、行き先で同郷だとわかったと、タクシー代をどうしても徴収しないという一幕もあったそうだ。私はこの話に感動した。同郷なのだから当然、と言うこともできるだろうが、改革開放政策が始まって以来30年、何もかもが目まぐるしく変わっている中で、変わらない人情に触れることができて胸が熱くなった。また、準備を手伝ってくれた親戚の一人が仕事を数日間休んだため、思わずそのまま職を失ってしまった。まったく申し訳ない。

父の故郷には5年前に初めて一度立ち寄ったことがある。その時は町から村までは、ろくな道路もなかった。しかし今はタクシーが縦横に疾走している。ドライバーたちは無線や携帯電話で乗せた客の向かう先と待ち客の居場所を互いに連絡しあい、実に効率よく営業しているようだった。

ただ、不可解な場面にも出くわした。広々とした良い道をスムーズに走って来たのに、突然前方にバリケードが立ち塞がって、仕方なく昔のでこぼこ小道に暫く追い込まれてしまう。理由を尋ねると、地方政府に不満がある村民が自分の村に通る道を勝手に塞いでいたのだそうだ。自由がないとよく言われる国なのに、場合によっては手前勝手な自由以上のものも幅を利かせる。法治の隙間を利用して自由放任を「享受」する。日本では考えられないことだ。

村に到着すると、親戚や村の人たちは村の入り口にすでに集まって待っていた。ラッパを吹いて練り歩く群衆の後に並び、供花などを捧げて、墓地に繰り出した。墓地は小さな丘の上だ。風水師が墓穴の中に入って再確認してから、私に入れと指図した。墓の中の清掃をするのだ。地面から深く掘られていたので、容易に下りることができなかった。さらに低くて狭い墓穴の「玄関」から中へ潜らなければならなかった。が、中は想像以上広かった。普通の家宅のようにしつらえてある。

私は腰を屈めて、言われた通りに埃を外向きに箒で「炕(kang、カン)」⁴⁾も床も隅々まで掃いた。本来なら娘ではなく、嫁の務めなのだそうだ。掃除が行き届いたところで、風水師は、父の骨箱を掃除済みの「炕」の真ん中に安置し、その前に茶碗と箸を揃えた。「炕」の縁側下の両側には満杯の「金銀財宝」の籠とともに父の文房四宝⁵⁾を並べてくれた。

父がこの世にいる最後の時刻になる。私は父の「陰宅」をもう一度見回した。兄と弟も狭い中、大きな体で難儀して下りて来て墓の中の様子を目に収めた。すべて整え、扉を合わせた。父がいつでも出られるように、扉の門は外したままで掛けはしなかった。

土を添える前に、墓穴の先に煉瓦壁を築いた。母が父と再会する日に、凍土で墓が開かなくなる恐れがあるからだそうだ。壁が出来上がってから、墓に土を揚げ、やがて小山のように積み上げた。立てた碑石の手前に父の大好きだった松の木を植え、お香を上げ、供花を飾り、お酒を一周撒かした。祖母の場合は紙幣の冥紙⁶⁾を焼いたが、今回はしなかった。

兄は碑石に父の名前と並んで刻んである母の名前を赤で塗り直した。そこへ兄弟と並んで、手を合わせて父にゆっくりと跪いていった。背後で親族と村人たちの鳴らした爆竹の音が早春の冷たい空気を遠く破き、いつまでも響いていた。

父に贈られる

父との触れ合いを思い出したい。

父は出張がなければ、土曜の夕食後は必ず家庭会議を開いた。私たちに学校の出来事を報告させ、1週間の成績簿を見せる。父は点数によって、赤旗、青旗をつけて表にまとめ、壁に貼る——どうも父はこの時から壁の利用価値を心得ていたようだ。記憶の中では、その頃小学校3年から毎週作文の授業があった。父は私たちに自分の書いたものを順番に読ませてから、「論評」をした。兄の作文はよく褒められていた。何かトラブルがあると父も母も担任まで相談をするのだ。小学校5年時、私は周りに影響されてダンスに熱中し、中学校に行くまいと思ったことがある。それを同じ学校に通っていた兄から耳にしたらしく、寮生の晩自習の時間、両親が突然廊下に現れ、担任を教室から呼び出した。進学の説得を担任に頼みに来たのだった。

振り返ればどれも自分たちに関わる父のことだが、父自身のことや考えについては、私は知らないのだった。尋ねたこともなく、父から話されたこともなかった。北京に戻り、父の『回想録』を初めて読んだ。

1957年夏の反右派運動は、早くも父にとってその後も度々吹き荒れた粛正の最初の「洗礼」だったといえる。折しも中国共産党中央党校で研修中の父は、政治の風向きも知らずに学習会で「右翼主義者」に同情し、擁護する発言をした。すぐに「反右派運動の邪魔者、重大な右翼の思想があり、温情主義者」と厳しく指摘され、口頭および書面にて繰り返し自己批判を強いられた。母に当時の様子を確認めると、父が職から追放されることも覚悟し、家族を連れて郷里に戻り、父は地元小学校の仕事をを見つけ、自分は内職で私たちを育てようと話し合っていたと教えてくれた。確かに母は編み物が得意であった。

幸い父は「党中央と毛沢東反対の言動が見つからなかった」ため、辛うじて党校での研修を終業できた。

父は職場に戻ってから、指導部に特に追究されることもなく、すぐに仕事に没頭することができた。厳しい党内闘争の中、右翼分子を摘発しようとする動きに多くの職場や人々が怯えていたが、中央農村工作部はそうならなかった。父は鄧子恢部長のおかげと感謝し、中国の農業政策に対する氏の正確で賢明な見識とその勇気のある人柄を深く尊敬していた。

この年の秋から中国各地で「大躍進」⁷⁾運動が始まった。「人有多大胆、地有多大産(人間は大きな度胸があれば、土地はそれに応じた成果をもたらしてくれる)」と唱えられたほどに、この運動は人の主観的意志を無限評価し、経済発展の法則を無視した故に農村経済の混乱を招いた。その上に自然災害に見舞われ、全国的に深刻な食糧不足に陥り、数多くの餓死者を出した。調査先で餓死者を目の当たりに見て、父は涙を流し、食事が喉を通らなかったという。

だが、先の「教訓」を受け、父は「大躍進」、また後の人民公社化運動⁸⁾などに不満と懐疑があっても、公の場での発言は避けていた。

「大躍進」政策がやがて失敗を喫し、農村経済を救済するために60年代の初めに、鄧子恢から「三自一包」⁹⁾の措置が提起された。生産を家族で請け負い、生産利益を農民の物質利益と直接結び付ける家族生産責任制という措置だ。父はこの政策の執行に深く関わっていた。

実際この措置によって、自然災害の折、農民たちはどれほど助かったか計り知れない。この試みはまた80年代以降に中国全土で押し進められた農村の経済改造の一つとなった。

しかし、提案者である鄧子恢氏は当時、毛沢東から「小脚女人（纏足をした女）」と呼ばれ、提案は「右翼的」と否定された。63年10月、「中央農村工作部は10年間よき事を一つもしなかった」という理由で、機構ごと取り消された。「廟拆了、菩薩自然搬走了(お寺が取り壊され、お釈迦様もおのずから運び出されてしまった)」、と父は部長の更迭を嘆いて言った。

私は小学校のその頃、お宅を訪ねてクラスメートであった氏の娘を遊びに誘ったことがある。玄関先で藤の椅子に深く坐っていた小柄な氏を何度か見かけていた。「こんにちは」と挨拶すると、穏やかに微笑んでくれた。このおじさんは暇そうなのだ、と子ども心に不思議に思い、おじさんの笑顔にどこか寂しそうなものも感じていた。氏は、文革中に病気で亡くなった。

中央農村工作部の解体後、父は新設の國務院農林弁公室に配属され、依然として農業政策研究の職務で多忙だった。

66年初夏、革命の嵐が到来した。早魃被害地域へ出張中だった父は、6月に急遽北京に呼び戻され、「一夜」にして「黒幫分子、披着羊皮的狼（反動分子、羊の皮を覆った狼）」となった。罪名として、「三自一包」政策との関わり他に、田家英との「曖昧な関係」が問われていた。

田家英の娘さんと同級生だった兄の口から氏のことを聞いたことがある。1948年から66年、文化大革命の直前まで18年毛沢東身邊の秘書を務めた人物だ。『毛沢東選集』全四巻などの注釈校訂の中心役、マルクス著作中国語翻訳版の序文、公文書の起草などの大任に堪えた、優秀な文化人だ。一方、毛沢東直接の指示で「農村工作六十条」¹⁰⁾立案のブレーンとして参画し、「大躍進」以来農業政策の左翼的傾向の修正に心血を注ぎ、精根を傾けた、正直で温厚な農業政策家ともいえよう。氏は不幸にも文化大革命の前夜、5月23日に自殺に追い込まれた。享年44歳だった。

父は1955年から仕事を通して氏と知り合い、「農村工作六十条」の起草についても最初からこの仕事に参加していた際に親交が深まった。人民公社の実状を把握するため、60年代初期毛沢東自らの手配と指示で、全国に対して、代表的な省の農村に長期間入り、調査研究を行うこととなり、氏は浙江、山西、湖南3省に赴くチームを任された。父はこの3度とも氏に同行している。

浙江省のもっとも貧しい調査先では、昼間はそれぞれ調査、訪問に出かけて、夜は壁もない草わらのぼろ宿に戻り、打ち合わせや議論を重ねた。電気がなく、相手の顔も見えないが、誰もが胸襟を開いて熱論し、「何年もこんなにいい気持ちや味わったことはなかった」と父はしみりと振り返っていた。きっと、お互いの心が見えたからだろう。

61年1月から翌年6月まで、前後合わせて9ヶ月に及んで父は氏と一緒に仕事をし、多くのことを学んだ。父は氏を「良師益友」と心底から信頼し、慕っている。65年冬、地方へ執務中の父は、氏が別用命で近辺のホテルに滞在中だと知ると、わざわざ立ち寄り、4年前に共同調査を行った貧しかった村の変貌を伝えて、喜びを分かち合いながら昼食をともにした。父は、「玄関まで見送られ、握手で別れたのがまさか永別だとは夢にも思えなかった」と書いている。

一夜にして文革の弾劾の壇上に立たされた父は審査されても動じることはなく、数年分の日記

を職場に差し出した。職場には父を名指しで批判する大字報(壁新聞)が張られ、職員が家まで来て、父のメモ帳と調査資料を残さず引っ張り出し、電話を取り外して、職場の割り当てたソファや筆筒を持って行った。父は職を解かれ、自己批判の他に肉体労働を命ぜられ、「悪者」ばかりを見せしめに行進させるデモ集会に参列させられた。父は、無実を晴らすことができた暁には、田舎で農民になろうと母に言った。

69年5月、両親が祖母を連れて湖北省の沙洋にある「五七幹校(五七幹部学校)」¹¹⁾に移った。その主旨は、文化大革命を続けながら労働に従事することであった。父はいわば批判を受け続ける農民だったが、労働そのものは楽しんでいただ。

当時のことを振り返る記述によると、父の初仕事は「犁耙手(耕し手)」だった。鞭を掲げ、号令を発したら、水牛は重い鉄犁を引っ張って、水田をまっすぐ前進していく。水牛は人間の言葉が分かるのだ、と父は相棒を可愛がった。ただ冷たい雨の日には寒さで震えていて辛かったのだ。

次のポジションは食堂の「火夫」だ。ボイラーマンといっても、かまどに火を起すという原始的な作業だが、技術が要る。150キロの饅頭を作るには、10分以内で蒸器から蒸気が出るように一気に火力を上げなければ、饅頭は膨らまない。100キロの米炊きもそうだ。10分以内に沸騰させられないと、ご飯は生煮えになってしまう。父はかまどの修理までこなし、自分のことを「火頭軍(かまど將軍)」と自称し、以前の仕事の夜型とは打って変わって、毎朝一番早く起きる人となった。

そして豚のトサツ屋も兼任していた。週一頭の実績で、豚小屋から連れ出すのがもっとも骨が折れたらしい。100キロ以上もする豚は中々元気で、怒ると人を噛むため、いつも2、3人の援軍と共に繰り出し、まず捕まえ、倒して、足を縛ってから食堂へ担いでくる。2人が足を押さえてくれたら、父は左手で「犠牲者」の鎖骨の致命所を確かめて、一刺して任務終了。いつの間にか「裴一刀」との綽名まで頂戴していた。

家では台所に立つ父を見たことがない。けれども私は今になって初めて気付いた。間違いなく私は父の起した火で作ったふかふかの饅頭やご飯を食べていた。「恐ろしいお手柄」であるお肉もご馳走になったのだ。

話の順序が逆になるが、親たちが幹校に行って間もなく、労働力として、子女を各自の下放¹²⁾先から親のいる幹校に呼び戻せるようになり、私も69年8月に千キロ離れた延安地方の山地から親元の南方に來た。軍隊編制で寮に入り、生産活動や政治学習も別々であったが、翌年12月に幹校を離れるまで私にとっては親元に最も長く「暮らした」時期だった。

父が冷たい水田の労働で腿を痛めた際、私は父に鍼を数回「施し」た。さすがに「人有多大胆(人間は大きな度胸があれば)」との標語が幅を利かせる時代の色に染まっていたのか、私はまったくの素人にもかかわらず、鍼灸の本を片手に果敢に実践した。消毒もしなかったように思うが、効いたらしい。或いは、娘の気で効かせたという方が正確かもしれない。地元では女が田を耕すことは御法度だったが、幹校では子女の強い希望でまもなくこの作業を親世代から肩代わりすることができるようになった。生前の父のために私がした唯一の親孝行といまは思う。

72年末に父は名誉を回復され、翌年には農林部政策研究室の責任者として職場復帰を果たした。私は地元の銑鉄工場に入り、大学に入学し、就職、結婚、留学などして、親からまた遠く離れてしまった。

政治的な試練を受けた時、父は一体どう感じ、どんな考えを持ち、どのように生きたのか、もっ

と知りたいと思っていた。もう少し長生きしてくれればと父に頼みたかった。しかし父を故郷へ送り、それから父の回想録を読みながら、祖母のもと、故郷の土に戻った父が、生き返って来たかのように感じた。校門前の父よりもバス停の父よりも、農民の子としての父の姿が生き生きとよみがえってきた。

父は最も働き盛りの時に何もできなかったにもかかわらず、愚痴一つこぼしていなかった。理不尽なことが起きても、信念を曲げなかった。どんな境遇でも逃げずに立ち向かった。父は結局よき先輩、良き友に巡り会い、よき仕事に励み、自分らしい人生を送ることができて、幸せだったといえる。だから最後に安心して母の子に戻り、祖母の膝元に身を委ね、ゆっくり休むことができたのだろう。祖母のもとに戻った父は何よりも安らぎを感じただろう。

今回、父の頼みを果たし、親孝行をしたようだが、これは父に最後に貰ったおくりものだと気付く。

父は、いわばこの儀式の場を子に手渡して、生の本質を告げ、真つ向から死と向き合うチャンスを与えてくれた。これは一種逆方向のはなむけではないか。そのおかげで、死に対する心構えさえほんの少しでも出来たような気がして、僅かだが何だか安心もした。私は、文革後の父の歳も過ぎているが、迷いながらも家族や友人、周囲の人々に感謝の気持ちを持って、日々を大事に生きたい。人生に迷いながらも成長していき、生きることだけでも大きな意味がある。

儀式は尊重を表す。死者と遺族への尊重だけではなく、命に対する尊重を表している。命は生きていた時も亡くなってからも美しいものだ。私たちはかつて生きていた命を慕い、懐かしむのだ。儀式がこうした生と死の会話を完成させ、生と死を融合させてくれる。映画「おくりびと」が見せてくれたのも死という事実だけではなく、死という窓口だ。この窓口を通して、命の尊重、人生への思索、死者への尊敬を教えてくれた。死はそんなに怖くなく、すべては自然に任せ、命に完成の終止符を打つ完璧の美さえ感じさせられる。

映画のタイトルには漢字は使っていない。私はこの題名は葬儀に関する職業の職名ではなく、“おくりびと”と“おくらべと”との相互関係を意味し、葬儀の場に居合わせるすべての人々の繋がりも物語っていると感じる。納棺師というよりも、ひとりの人間として、故人を真摯に送り出す“おくりびと”、故人の旅立ちをじっと見守る遺族、友人という“おくりびと”、そしてこのように優しく送り出される故人もまた生者の行く末を案じる“おくりびと”ではないか。奥ゆかしく、思いやりのあるタイトルだ、と理解したのは勝手なのだろうか。

中国語訳は単純に「入殮師(納棺師)」という職業名になっている。“おくりびと”と“おくらべと”の関係も見えず、その間に流れている情感も伝わってこない。素っ気無いことこの上ない。

白川静氏は、「漢字は一種の映像だ。平仮名やカタカナは響きがあるが、姿が見えない」と仰っていた、と『朝日新聞』でいつか氏の漢字に対する認識を紹介したことがある。なるほど形象文字としての漢字の映像性は有難い。しかし、逆の場合もないとは言い切れないだろう。この「おくりびと」というひらがなは映像こそないが、見るものにはそこに漂って、そこはかとない優しさ、温もりをそれぞれ体感し、各人各様の人との繋がり思いを馳せることができるだろう。実際、日野原重明氏は「『ノウカンシ』についてのストーリーと聞いていたので、てっきり『脳幹死』で、脳疾患の患者の世話をする映画だと思い込んで」¹³⁾いたという笑える誤解もあった。

老いも死もわが身からは遠いものと思っても、実はいつも自分の隣りにいる。誰でもいつか、

おくりびと、おくられびとになる。いや、どちらもおくりびとだと理解してもいい。旅立ちに向かう故人も死別の淵に立たされる遺族も、お互いに送り出し、見送り、そのなかで贈りあうという経験を得る。映画「おくりびと」は現代にそのメッセージを届けてくれているといえるのではないだろうか。

-
- 1) 中国的なお盆で、昔は旧暦の3月3日だった。旧暦なら日付は毎年違い、統一させるために、今は新暦4月5日に改められている。祖先の墓を参り、草むしりをして墓を掃除することから、「掃墓節（お墓を清める日）」とも言う。
 - 2) 北京の代表的な共同供養地。
 - 3) 史家杰「特別的爱献给特别的你」『国葬 長編紀実文学』（華文出版社 2008.4 P27-28）。
 - 4) 韓国の「オンドル」のような土の寝床を指す。かまどと繋がって造られているので、炊事の余熱で「炕」が温まるのだ。都会で今はもう見られないが、私は下放(注12参考)先の延安地区ではまだ昔ながらの「炕」を使っていた。
 - 5) 書齋に備える所謂四つの宝物、筆、墨、紙、硯という文房具。
 - 6) 「天国銀行」という確乎たる出所が印刷されたあの世の「通貨」。
 - 7) 生産を大いに躍進させようとする運動。翌年この運動に煽られ、「跑步進共產主義（走って共產主義に進む）」と各地を一層熱狂させ、農民の自留地（自家耕地）も共產主義社会の逆行だと槍玉にされ、取り上げられそうになった。
 - 8) 行政と経済組織が一体化される農業集団。生産資産から分配制度まで公社所有制によって運営され、村民の生産活動と日常生活全てをこの統括された生産手段の中で営むことになる。「共產主義は天堂、人民公社是橋梁」と当時よく唱えていたように、たとえば人民公社での食堂は勤勉者も怠け者も誰でもただで食べられていた。言うまでもなく農民の生産意欲がなくなり、食料が必要以上に浪費された。1978年以降の改革開放政策に伴って、人民公社は機能しなくなった。
 - 9) 「三自」は「自留地、自由市場、自負盈亏」、すなわち自家耕地を持ち、自由売買ができ、損益は自己責任となる、という。「一包」は「包産到戸(包産到隊、定産到田、責任到人)」、というのだ。農民たちが生産実践の中で作った言葉だそうだ。その目的は農民に経済的自由を与え、農民の働く意欲を高め、農村経済を活性化させ、農民の生活を向上させる。この家族生産責任制が人民公社との最大の違いは、農民は政府から生産を請負い、一定数量の農作物を国に上納した後、それ以外の余った農作物を自由に処分し、たとえば自由市場で販売したりすることができる。人民公社のような生産集団管理形態と農家単位責任形態との違いではないかと思う。
 - 10) 「農村人民公社工作条例(草案)」の略称。日本語では「農業六十条」と表現されている。
 - 11) 幹部が農村に下放し、労働を行う場。1966年5月7日、毛沢東が、各分野が他の分野を学び、生産活動に参加し、工業、農業を知り、知識、政治を学ぶ必要があるとの考えを示した。2年後、文化大革命中、黒龍江省が毛沢東の「五七指示」発表2周年を記念し、慶和県の柳河で農場を開き、当時「打倒」され、仕事がなく、安置に困っている幹部——公務員、技術者、高等教育者、頭脳労働者——を集め、各生産活動に参加させようとした。この農場が「五七幹校」と名付け、間もなく毛沢東の首肯を得、各地方に広がった。「五七幹校」は肉体労働の必要性を強調し、大量の人材、物資の浪費をもたらした上、人間性、能力、知識を抹殺し、多くの人々の心身とも傷つけてしまった。72年後相次ぎ閉校されることになった。
 - 12) 「上山下郷運動」の別称。毛沢東の指示によって、都市と農村の格差を克服するため、都市部の青少年が地方や農村などに行き、労働を通して「再教育」を受けること。1968年から10年続き、1600万余り、10%の都市人口が農村に行ったという。私自身は69年1月から8月まで学校の手配に応じて、列車で北京から西安まで、貨物車で西安から銅川まで、トラックで銅川から、3日間かかって、陝西省の延長県、延安から90キロ離れる黒家堡公社桃李坪大隊に下放した。
 - 13) 日野原重明「映画『おくりびと』を見て」（『朝日新聞』e5面、09.4.25）。